

ココンマ圏と profunctor

alg-d

http://alg-d.com/math/kan_extension/

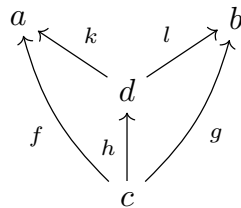
2021 年 11 月 8 日

これまで見てきた通り，圏論ではココンマ圏が非常に重要な役割を果たす．そうすると気になるのは，ココンマ圏の双対となる「ココンマ圏」は存在するのであろうか，ということである．

定義．圏 C の図式 $a \leftarrow c \rightarrow b$ を a から b への span という．双対的に，図式 $a \rightarrow c \leftarrow b$ を a から b への cospan という．

定義． C を圏， $a, b \in C$ を対象とする． a から b への span がなす圏 $\text{Span}_C(a, b)$ を以下のように定める．

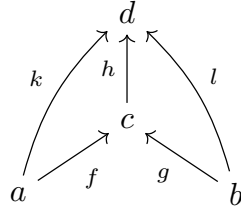
- $\text{Ob}(\text{Span}_C(a, b)) := \{\langle f, g \rangle \in \text{Mor}(C)^2 \mid c \in C, a \xleftarrow{f} c \xrightarrow{g} b\}$
- $\langle f, g \rangle, \langle k, l \rangle \in \text{Span}_C(a, b)$ とする． $c := \text{dom}(f)$ ， $d := \text{dom}(k)$ とする． $\langle f, g \rangle$ から $\langle k, l \rangle$ への射は，次の図式を可換とする射 $h: c \rightarrow d$ で定める．



圏 C が文脈から明らかな場合は添え字を省略して単に $\text{Span}(a, b)$ と書く．また同様にして cospan がなす圏 $\text{Cospan}_C(a, b)$ が以下のように定まる．

- $\text{Ob}(\text{Cospan}_C(a, b)) := \{\langle f, g \rangle \in \text{Mor}(C)^2 \mid c \in C, a \xrightarrow{f} c \xleftarrow{g} b\}$
- $\langle f, g \rangle, \langle k, l \rangle \in \text{Cospan}_C(a, b)$ とする． $c := \text{cod}(f)$ ， $d := \text{cod}(k)$ とする． $\langle f, g \rangle$ から $\langle k, l \rangle$ への射は，次の図式を可換とする射 $h: c \rightarrow d$ で定める．

ら $\langle k, l \rangle$ への射は、次の図式を可換とする射 $h: c \rightarrow d$ で定める.

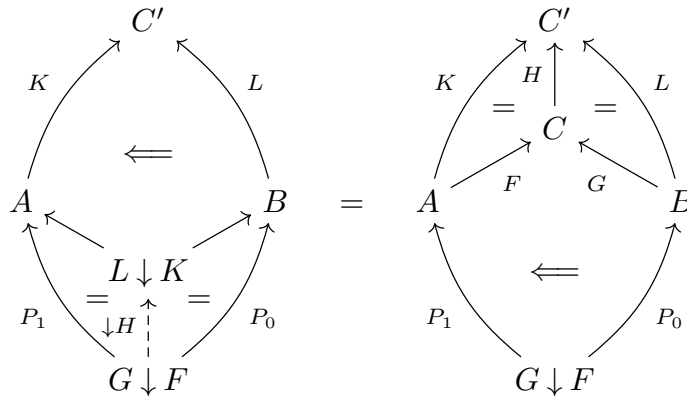


ここでは小圏の圏 **Cat** における span, cospan を考える.

$A \xrightarrow{F} C \xleftarrow{G} B$ を **Cat** の cospan としたとき、コンマ圏 $G \downarrow F$ は span $A \leftarrow G \downarrow F \rightarrow B$ を与えるのであった.*1

命題 1. コンマ圏を取る操作は関手 $\downarrow: \text{Cospan}(A, B) \rightarrow \text{Span}(A, B)$ を与える.

証明. $A \xrightarrow{F} C \xleftarrow{G} B$, $A \xrightarrow{K} D \xleftarrow{L} B$ を cospan, $H: \langle F, G \rangle \rightarrow \langle K, L \rangle$ を $\text{Cospan}(A, B)$ の射とする. このとき関手 $\downarrow H: G \downarrow F \rightarrow L \downarrow K$ をコンマ圏の普遍性により定める.



普遍性により、これは明らかに関手 $\downarrow: \text{Cospan}(A, B) \rightarrow \text{Span}(A, B)$ を与える. □

そこで、もしこの関手が左随伴を持つとすると、それが「ココンマ圏を与える関手」であるとみなすことができる. というのも「コンマ圏の普遍性」の双対バージョン (定理 2) が成り立つからである.

それを説明するため、関手 \downarrow が左随伴 $\uparrow: \text{Span}(A, B) \rightarrow \text{Cospan}(A, B)$ を持つとして、その unit を η とする. $A \xleftarrow{F} C \xrightarrow{G} B$ を span とすると $\uparrow \langle F, G \rangle$ は cospan であるから、それを $A \xrightarrow{Q_0} F \uparrow G \xleftarrow{Q_1} B$ と書くと、これのコンマ圏を考えることができる. このとき

*1 後の構成の都合上、 $F \downarrow G$ ではなく $G \downarrow F$ を考える. ここを $F \downarrow G$ に変えた場合は、後で出てくる $\mathbf{Prof}(A, B)$ が $\mathbf{Prof}(B, A)$ になる.

$S := \eta_{\langle F, G \rangle}$ は $\text{Span}(A, B)$ の射 $C \rightarrow Q_1 \downarrow Q_0$ (次の図式の点線の射) のことである (ここで P_0, P_1, θ はコンマ圏 $Q_1 \downarrow Q_0$ から得られる関手と自然変換である).

$$\begin{array}{ccccc}
 & & A & \xrightarrow{Q_0} & F \uparrow G \\
 & & \uparrow P_1 & \swarrow \theta & \uparrow Q_1 \\
 & & Q_1 \downarrow Q_0 & \xrightarrow{P_0} & B \\
 & & \uparrow & \parallel & \uparrow \\
 C & \xrightarrow{F} & & & \\
 & \searrow S & & & \nearrow G \\
 & & & &
 \end{array}$$

これらを合成して得られる自然変換を $\rho: Q_1 G \Rightarrow Q_0 F$ とする.

定理 2. 関手 \downarrow が左随伴 $\uparrow: \text{Span}(A, B) \rightarrow \text{Cospan}(A, B)$ を持つとする. このとき上のように定義した図式

$$\begin{array}{ccc}
 A & \xrightarrow{Q_0} & F \uparrow G \\
 F \uparrow & \swarrow \rho & \uparrow Q_1 \\
 C & \xrightarrow{G} & B
 \end{array}$$

は次の普遍性を満たす: X を圏, $R_0: A \rightarrow X$, $R_1: B \rightarrow X$ を関手, $\alpha: R_1 G \Rightarrow R_0 F$ を自然変換とする.

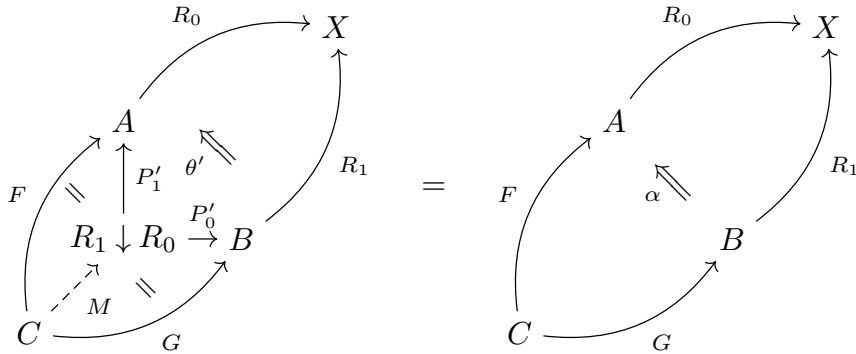
$$\begin{array}{ccc}
 A & \xrightarrow{R_0} & X \\
 F \uparrow & \swarrow \alpha & \uparrow R_1 \\
 C & \xrightarrow{G} & B
 \end{array}$$

このとき関手 $H: F \uparrow G \rightarrow X$ が一意に存在して以下を満たす.

- (1) $HQ_0 = R_0$, $HQ_1 = R_1$ である.
- (2) 次の自然変換の等式が成り立つ.

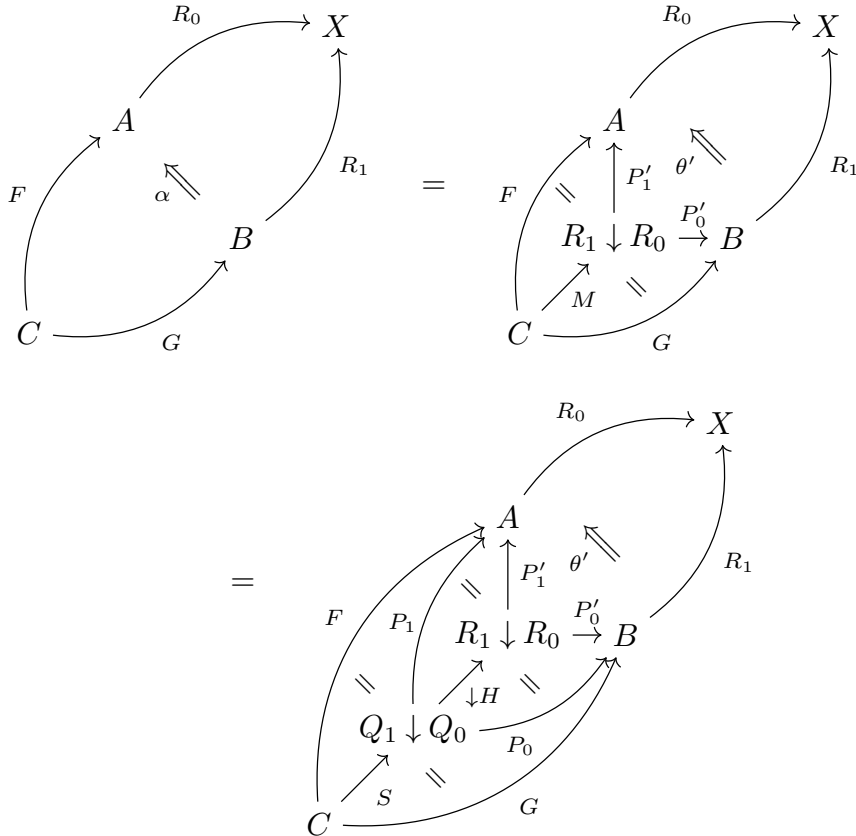
$$\begin{array}{ccc}
 \begin{array}{ccccc}
 & & A & \xrightarrow{Q_0} & F \uparrow G \\
 & & \uparrow P_1 & \swarrow \theta & \uparrow Q_1 \\
 & & Q_1 \downarrow Q_0 & \xrightarrow{P_0} & B \\
 & & \uparrow & \parallel & \uparrow \\
 C & \xrightarrow{F} & & & \\
 & \searrow S & & & \nearrow G \\
 & & & &
 \end{array}
 & \xrightarrow{R_0} & X \\
 & \swarrow H & & & \nearrow R_1 \\
 & & & &
 \end{array}
 =
 \begin{array}{ccc}
 A & \xrightarrow{R_0} & X \\
 F \uparrow & \swarrow \alpha & \uparrow R_1 \\
 C & \xrightarrow{G} & B
 \end{array}$$

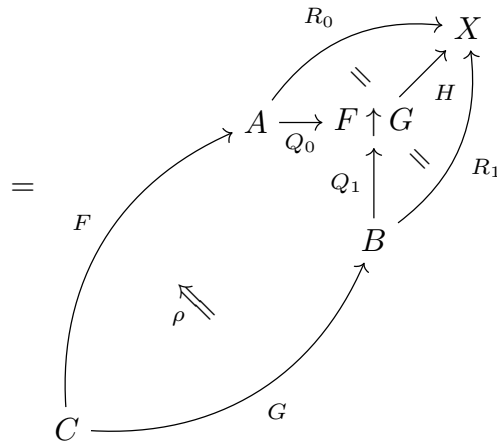
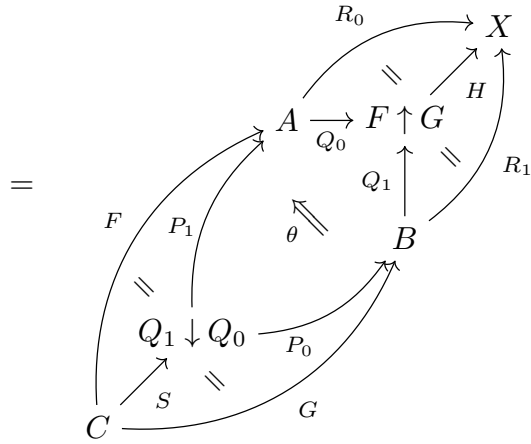
証明. まず H の存在を示す. そのためにコマ圏 $R_1 \downarrow R_0$ を取り, そこから得られる関手と自然変換を P'_0, P'_1, θ' とする. 普遍性により次の図式の点線の関手 $M: C \rightarrow R_1 \downarrow R_0$ が得られる.



このとき随伴 $\text{Hom}(\uparrow\langle F, G \rangle, \langle R_0, R_1 \rangle) \cong \text{Hom}(\langle F, G \rangle, \downarrow\langle R_0, R_1 \rangle)$ により, M の随伴射となる関手 $H: F \uparrow G \rightarrow X$ が取れる. これが条件 (1)(2) を満たすことを示す.

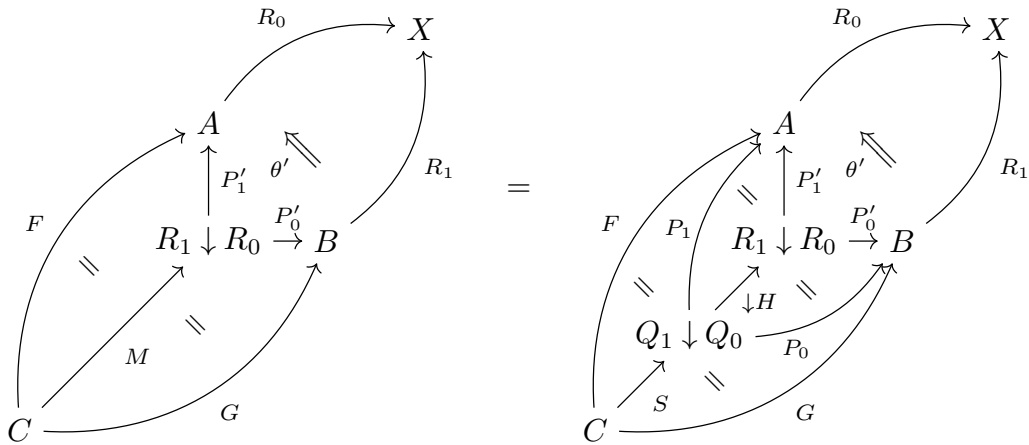
まず条件 (1) は, 定義より H が $\text{Cospan}(A, B)$ の射であるからよい. 条件 (2) を示そう. 随伴の unit の性質から $\downarrow H \circ S = M$ が成り立つ. 従って

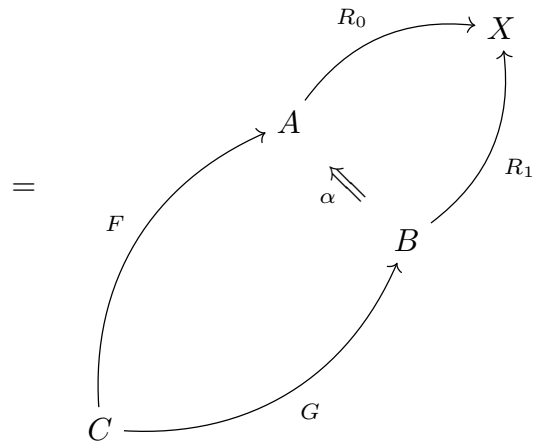
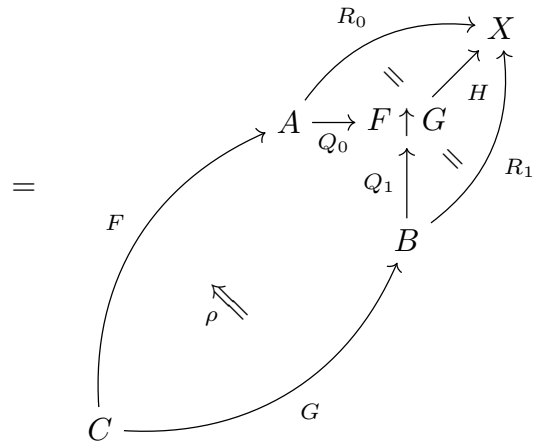
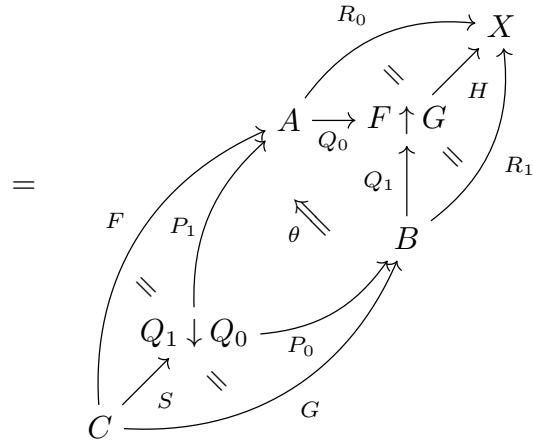




となり条件 (2) が成り立つ.

後は H の一意性を示せばよい. H が条件 (1)(2) を満たすとすると H は $\text{Cospan}(A, B)$ の射 $F \uparrow G \rightarrow X$ だから, 随伴射 $M: C \rightarrow R_1 \downarrow R_0$ が取れる. 従ってこの M が一意であることを示せばよい. 再び unit の性質から, これは $\downarrow H \circ S = M$ を満たす. 故に





となるから、 $R_1 \downarrow R_0$ の普遍性により M は一意である。 □

そこで問題は $\downarrow: \text{Cospan}(A, B) \rightarrow \text{Span}(A, B)$ が左随伴を持つか、ということになる。答えは存在する、であるが、これを構成するために profunctor というものを導入する。

定義. C, D を圏とする. C から D への profunctor (もしくは distributor もしくは correspondence もしくは bimodule) とは関手 $P: C \rightarrow \widehat{D}$ のことである. profunctor を記号 $P: C \multimap D$ などと表す.

自然同型 $\text{Hom}_{\mathbf{Cat}}(A \times B, C) \cong \text{Hom}_{\mathbf{Cat}}(A, C^B)$ により, profunctor $P: C \multimap D$ 即ち関手 $P: C \rightarrow \widehat{D}$ と関手 $P: D^{\text{op}} \times C \rightarrow \mathbf{Set}$ を同一視することができる. 以下, 特に断らずこの同一視を行う. また C から D への profunctor がなす圏を $\mathbf{Prof}(C, D) := \mathbf{Set}^{D^{\text{op}} \times C}$ で定める.

定義. $P: A \multimap B, Q: B \multimap C$ に対して profunctor の合成 $Q \otimes P: A \multimap C$ を関手 $(y^\dagger Q) \circ P: A \rightarrow \widehat{C}$ で定める.

$$\begin{array}{ccccc}
 & & \widehat{B} & \xrightarrow{y^\dagger Q} & \widehat{C} \\
 & \nearrow P & \uparrow y & \nearrow Q & \\
 A & & B & &
 \end{array}$$

圏 C に対して米田埋込 $y: C \rightarrow \widehat{C}$ が定める profunctor を $\text{id}_C: C \multimap C$ と表す. 米田埋込と左 Kan 拡張の性質から容易に分かるように $P: C \multimap D$ に対して $P \otimes \text{id}_C \cong P, \text{id}_D \otimes P \cong P$ である.

命題 3. $P: A \multimap B, Q: B \multimap C$ を profunctor とするとき, $a \in A$ に対して

$$Q \otimes P(a) \cong \int^{b \in B} P(b, a) \times Q(-, b).$$

証明. $X \in \widehat{B}$ に対して $y^\dagger Q(X) \cong \int^{b \in B} \text{Hom}_{\widehat{B}}(y(b), X) \times Qb \cong \int^{b \in B} Xb \times Qb$ であるから $Q \otimes P(a) = y^\dagger Q(Pa) \cong \int^{b \in B} Pa(b) \times Qb = \int^{b \in B} P(b, a) \times Q(-, b). \quad \square$

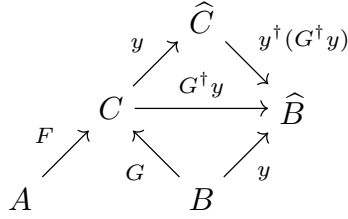
$F: C \rightarrow D$ を関手とする. このとき profunctor $F_*: C \multimap D, F^*: D \multimap C$ が

$$F_*(d, c) := \text{Hom}_D(d, Fc), \quad F^*(c, d) := \text{Hom}_D(Fc, d)$$

により定まる. つまり $F_*(c) = y \circ F(c) = F^{-1}y(c), F^*(d) \cong F^\dagger y(d)$ である.

そこで cospan $A \xrightarrow{F} C \xleftarrow{G} B$ に対して profunctor $A \multimap B$ が $G^* \otimes F_*$ により得られる. これは

$$G^* \otimes F_* \cong (G^\dagger y) \otimes (y \circ F) \cong y^\dagger(G^\dagger y) \circ y \circ F$$



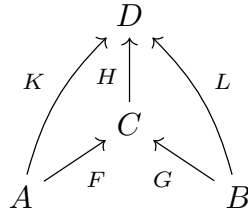
となる. ここで y が忠実充満より $y^\dagger(G^\dagger y) \circ y \cong G^\dagger y$ となるから結局 $G^* \otimes F_* \cong (G^\dagger y) \circ F$ が分かる. そこで $\Phi\langle F, G \rangle := (G^\dagger y) \circ F$ と定める. 各点 Kan 拡張の性質から, $a \in A$ に対して

$$\Phi\langle F, G \rangle(a) = G^\dagger y(Fa) \cong \text{Hom}_C(G-, Fa)$$

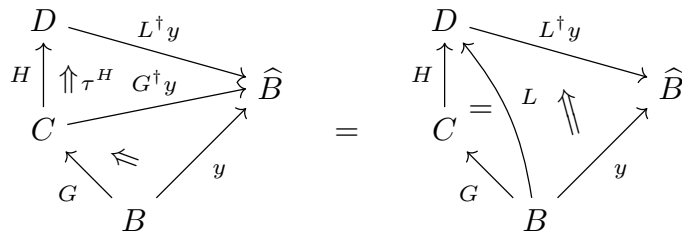
となる.

命題 4. $\Phi: \text{Cospan}(A, B) \rightarrow \mathbf{Prof}(A, B)$ は関手となる.

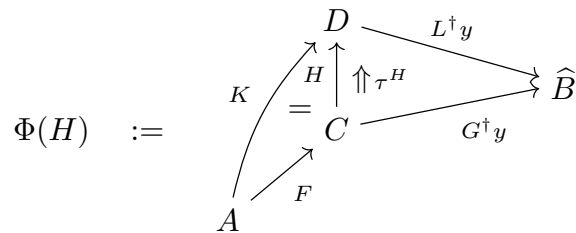
証明. $\text{Cospan}(A, B)$ の射 $H: \langle F, G \rangle \rightarrow \langle K, L \rangle$ (次の図式を参照) を取る.



ここで自然変換 τ^H を, 左 Kan 拡張 $G^\dagger y$ の普遍性により, 次の等号が成り立つように取る.

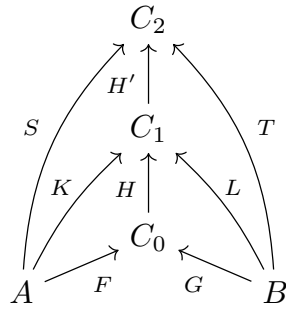


この τ^H を使って自然変換 $\Phi(H): \Phi\langle F, G \rangle \Rightarrow \Phi\langle K, L \rangle$ が得られる.

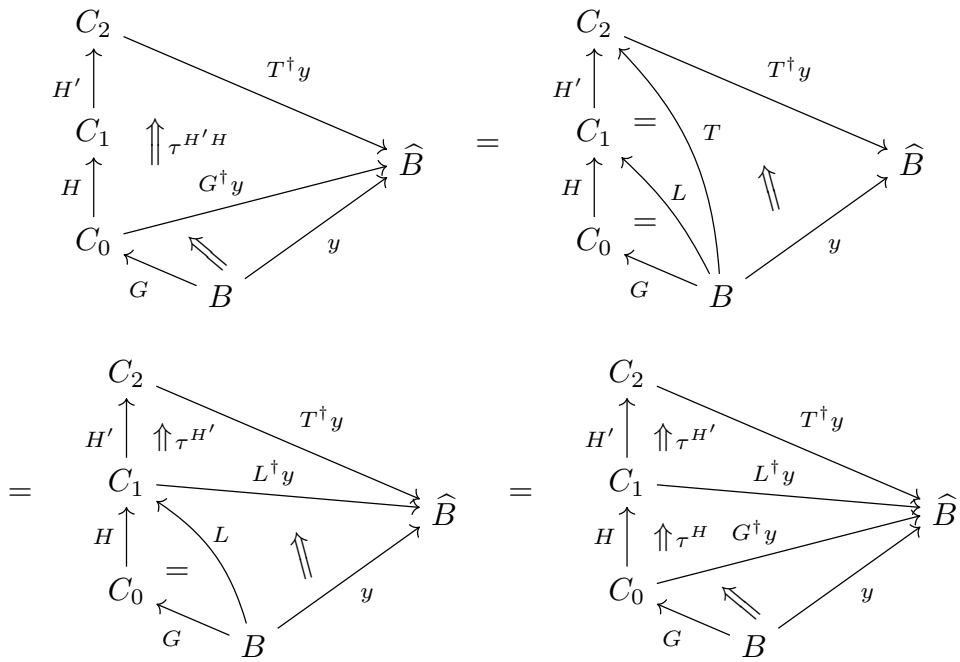


これにより Φ が関手になることを示せばよい.

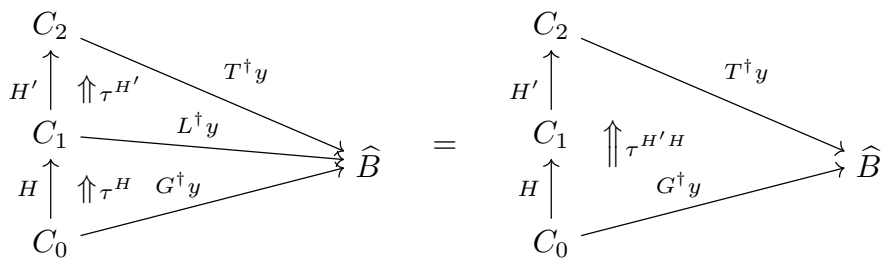
まず $H = \text{id}$ の場合は $G = L$ となるから $G^\dagger y = L^\dagger y$ であり, 故に $\tau^{\text{id}} = \text{id}$ となるから $\Phi(\text{id}) = \text{id}$ である. 故に Φ が合成と交換することを示せばよい. そこで H, H' を次の図式のような $\text{Cospan}(A, B)$ の射とする.



このとき τ の定義より



となるから, 左 Kan 拡張 $G^\dagger y$ の普遍性により

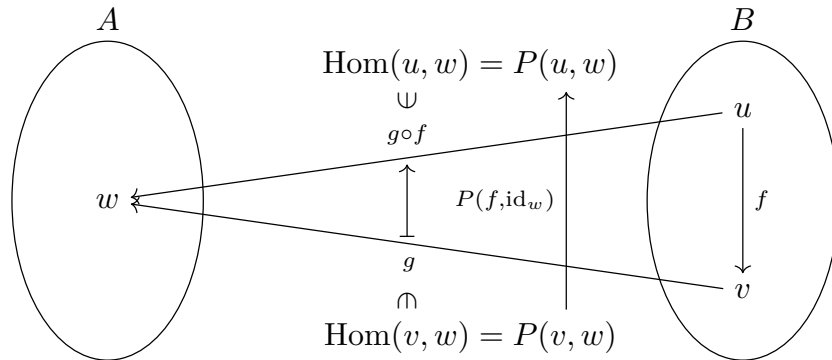


となるので $\Phi(H'H) = \Phi(H')\Phi(H)$ が分かる。 \square

逆に profunctor $P: A \rightleftarrows B$ に対して cospan $\Sigma(P) = (A \xrightarrow{F_P} C_P \xleftarrow{G_P} B)$ を以下のように定義することができる。まず圏 C_P を次により定める。

- $\text{Ob}(C_P) := \text{Ob}(A) \sqcup \text{Ob}(B)$
- $\text{Hom}_{C_P}(u, v) := \begin{cases} \text{Hom}_A(u, v) & (u, v \in A \text{ のとき}) \\ \text{Hom}_B(u, v) & (u, v \in B \text{ のとき}) \\ \emptyset & (u \in A, v \in B \text{ のとき}) \\ P(u, v) & (u \in B, v \in A \text{ のとき}) \end{cases}$
- 射 $f: u \rightarrow v, g: v \rightarrow w$ の合成 $g \circ f$ を次で定める。

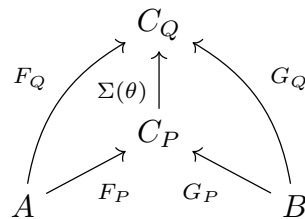
$$g \circ f := \begin{cases} g \circ f & (u, v, w \in A \text{ のとき}) \\ g \circ f & (u, v, w \in B \text{ のとき}) \\ P(f, \text{id}_w)(g) & (u, v \in B, w \in A \text{ のとき. 下図参照}) \\ P(\text{id}_u, g)(f) & (u \in B, v, w \in A \text{ のとき}) \end{cases}$$



関手 $F_P: A \rightarrow C_P, G_P: B \rightarrow C_P$ を標準的な埋込とすれば $\Sigma(P) \in \text{Cospan}(A, B)$ である。

命題 5. $\Sigma: \mathbf{Prof}(A, B) \rightarrow \text{Cospan}(A, B)$ は関手となる。

証明. $\mathbf{Prof}(A, B)$ の射 $\theta: P \Rightarrow Q$ に対して $\text{Cospan}(A, B)$ の射 $\Sigma(\theta): \Sigma(P) \rightarrow \Sigma(Q)$, 即ち次の図式が可換となるような関手 $\Sigma(\theta)$ を定めたい。



そのためには対象 $a \in A$, $b \in B$ に対して写像 $\Sigma(\theta): \text{Hom}_{C_P}(b, a) \rightarrow \text{Hom}_{C_Q}(b, a)$ をうまく定めればよい. Hom_{C_P} の定義から $\Sigma(\theta) := \theta_{ba}: P(b, a) \rightarrow Q(b, a)$ と定義することができる. これにより $\Sigma(\theta)$ は関手になる.

∴) 定義から $\Sigma(\theta)(\text{id}) = \text{id}$ は明らかである. 従って $f: u \rightarrow v$, $g: v \rightarrow w$ としたときに $\Sigma(\theta)(g \circ f) = \Sigma(\theta)(g) \circ \Sigma(\theta)(f)$ となることを示せばよい.

(i) $u, v, w \in A$ または $u, v, w \in B$ の場合, 明らか

(ii) $u, v \in B$, $w \in A$ の場合, 定義から

$$\Sigma(\theta)(g \circ f) = \theta_{uw}(g \circ f), \quad \Sigma(\theta)(g) = \theta_{vw}(g), \quad \Sigma(\theta)(f) = f$$

であり, 一方 θ が自然変換だから $\theta_{uw}(g \circ f) = \theta_{vw}(g) \circ f$ が分かる.

$$\begin{array}{ccc} P(u, w) & \xrightarrow{\theta_{uw}} & Q(u, w) \\ \uparrow P(f, \text{id}_w) & & \uparrow Q(f, \text{id}_w) \\ P(v, w) & \xrightarrow{\theta_{vw}} & Q(v, w) \end{array} \quad \begin{array}{ccc} g \circ f & \xrightarrow{\theta_{uw}} & \theta_{uw}(g \circ f) \\ \uparrow P(f, \text{id}_w) & & \uparrow \theta_{vw}(g) \circ f \\ g & \xrightarrow{\theta_{vw}} & \varphi_{vw}(g) \\ & & \uparrow Q(f, \text{id}_w) \end{array}$$

(iii) $u \in B$, $v, w \in A$ の場合, 定義から

$$\Sigma(\theta)(g \circ f) = \theta_{uw}(g \circ f), \quad \Sigma(\theta)(g) = g, \quad \Sigma(\theta)(f) = \theta_{uv}(f)$$

であり, 一方 θ が自然変換だから $\theta_{uw}(g \circ f) = g \circ \theta_{uv}(f)$ が分かる.

$$\begin{array}{ccc} P(u, v) & \xrightarrow{\theta_{uv}} & Q(u, v) \\ \downarrow P(\text{id}_u, g) & & \downarrow Q(\text{id}_u, g) \\ P(u, w) & \xrightarrow{\theta_{uw}} & Q(u, w) \end{array} \quad \begin{array}{ccc} f & \xrightarrow{\theta_{uv}} & \theta_{uv}(f) \\ \downarrow P(\text{id}_u, g) & & \downarrow Q(\text{id}_u, g) \\ g \circ f & \xrightarrow{\theta_{uw}} & \theta_{uw}(g \circ f) \\ & & \uparrow g \circ \theta_{uv}(f) \end{array}$$

以上により $\Sigma(\theta)$ は関手であることが分かった.

これにより Σ が関手になることを示す. Σ の定義より $\Sigma(\text{id}) = \text{id}$ は明らかである. そこで $\theta: P \Rightarrow Q$, $\sigma: Q \Rightarrow R$ に対して $\Sigma(\sigma \circ \theta) = \Sigma(\sigma) \circ \Sigma(\theta)$ を示す. そのためには $a \in A$, $b \in B$ に対して $(\sigma \circ \theta)_{ba} = \sigma_{ba} \circ \theta_{ba}$ を示せばよいが, それは自然変換の合成の定義である. \square

命題 6. 随伴 $\Sigma \dashv \Phi: \mathbf{Prof}(A, B) \rightarrow \mathbf{Cospan}(A, B)$ が成り立つ. 更にこれの unit は同

型である.

証明. 随伴であることを示すため, $P \in \mathbf{Prof}(A, B)$, $(A \xrightarrow{F} C \xleftarrow{G} B) \in \mathbf{Cospan}(A, B)$ について自然な全単射

$$\varphi: \mathbf{Hom}_{\mathbf{Cospan}(A, B)}(\Sigma(P), \langle F, G \rangle) \rightarrow \mathbf{Hom}_{\mathbf{Prof}(A, B)}(P, \Phi \langle F, G \rangle)$$

を定義する.

まず profunctor $P: A \rightleftarrows B$ に対して自然同型

$$\Phi(\Sigma(P))(-, \square) = \Phi(F_P, G_P)(-, \square) \cong \mathbf{Hom}_{C_P}(G_P -, F_P \square) = P(-, \square)$$

が成り立つ. この自然同型を $\eta: \text{id} \Rightarrow \Phi \circ \Sigma$ とする. また, θ を $\text{cod}(\theta) = \Phi \langle F, G \rangle$ なる自然変換としたとき, それと $\Phi \langle F, G \rangle \cong \mathbf{Hom}_C(G-, F\square)$ を合成して得られる自然変換を $\tilde{\theta}: P \Rightarrow \mathbf{Hom}_C(G-, F\square)$ と書くことにする.

$H: \Sigma(P) \rightarrow \langle F, G \rangle$ を cospan の射としたとき $\varphi(H) := \Phi(H) \circ \eta_P: P \Rightarrow \Phi \langle F, G \rangle$ と定める. 即ち

$$\varphi(H) := \begin{array}{c} \begin{array}{ccccc} & & C & & \\ & & \nearrow^{G^\dagger y} & & \\ & & & & \widehat{B} \\ & & \uparrow H & \nearrow^{G_P^\dagger y} & \\ & & C_P & & \\ & & \uparrow \tau^H & & \\ & & & & \\ & & \uparrow \eta_P & & \\ & & & & \\ A & & & & \\ & \nearrow^F & & \searrow^P & \\ & & & & \end{array} \\ \end{array}$$

である. φ は全単射 $\mathbf{Hom}(\Sigma(P), \langle F, G \rangle) \rightarrow \mathbf{Hom}(P, \Phi \langle F, G \rangle)$ を与える.

∴ $a \in A$, $b \in B$ として $f \in P(b, a)$ を取る. 即ち $f: b \rightarrow a$ は C_P の射である. このとき $\tau^H: G_P^\dagger y \Rightarrow (G^\dagger y) \circ H$ が自然変換であるから次の図式が可換である.

$$\begin{array}{ccccccc} \mathbf{Hom}_{C_P}(-, b) & \xrightarrow{\cong} & G_P^\dagger y(b) & \xrightarrow{\tau_b^H} & G^\dagger y(Hb) & \xrightarrow{\cong} & \mathbf{Hom}_C(G-, Gb) \\ f \circ - \downarrow & & \downarrow G_P^\dagger y(f) & & \downarrow G^\dagger y(Hf) & & \downarrow Gf \circ - \\ \mathbf{Hom}_{C_P}(-, a) & \xrightarrow{\cong} & G_P^\dagger y(a) & \xrightarrow{\tau_a^H} & G^\dagger y(Ha) & \xrightarrow{\cong} & \mathbf{Hom}_C(G-, Fa) \end{array}$$

よってこの図式の b 成分を考えると次の可換図式を得る.

$$\begin{array}{ccc}
 \text{Hom}_{C_P}(b, b) & \xrightarrow{G} & \text{Hom}_C(Gb, Gb) & \quad & \text{id}_b & \xrightarrow{G} & \text{id}_{Gb} \\
 \downarrow & & \downarrow & & \downarrow & & \downarrow \\
 \text{Hom}_{C_P}(b, a) & \xrightarrow{\widetilde{\varphi(H)}_{ba}} & \text{Hom}_C(Gb, Fa) & & f & \xrightarrow{\widetilde{\varphi(H)}_{ba}} & Hf
 \end{array}$$

従って写像 $\widetilde{\varphi(H)}_{ba}$ は $H: P(b, a) \rightarrow \text{Hom}_C(Gb, Fa)$ と一致しているから φ は単射である.

全射であることを示す. そのために $\theta: P \Rightarrow \Phi\langle F, G \rangle$ を自然変換とする. H を

- 対象 $x \in C_P$ に対して $Hx := \begin{cases} Fx & (x \in A) \\ Gx & (x \in B). \end{cases}$
- 射 $f: u \rightarrow v$ に対して $Hf := \begin{cases} Ff & (u, v \in A) \\ Gf & (u, v \in B) \\ \tilde{\theta}_{ba}(f) & (u \in B, v \in A). \end{cases}$

と定義する. この $H: C_P \rightarrow C$ は関手である.

∴ $H(\text{id}) = \text{id}$ は明らかなので $f: u \rightarrow v, g: v \rightarrow w$ として $H(g \circ f) = Hg \circ Hf$ を示す.

(i) $u, v, w \in A$ または $u, v, w \in B$ の場合, 明らか

(ii) $u, v \in B, w \in A$ の場合, 定義から

$$\begin{cases} H(g \circ f) & = & \tilde{\theta}_{uw}(g \circ f) \\ Hg & = & \tilde{\theta}_{vw}(g) \\ Hf & = & Gf \end{cases}$$

であり, 一方 $\tilde{\theta}$ が自然変換だから $\tilde{\theta}_{uw}(g \circ f) = \tilde{\theta}_{vw}(g) \circ Gf$ である.

$$\begin{array}{ccc}
 P(u, w) & \xrightarrow{\tilde{\theta}_{uw}} & \text{Hom}_C(Gu, Fw) & & g \circ f & \xrightarrow{\tilde{\theta}_{uw}} & \tilde{\theta}_{uw}(g \circ f) \\
 \uparrow P(f, \text{id}_w) & & \uparrow - \circ Gf & & \uparrow P(f, \text{id}_w) & & \tilde{\theta}_{vw}(g) \circ Gf \\
 P(v, w) & \xrightarrow{\tilde{\theta}_{vw}} & \text{Hom}_C(Gv, Fw) & & g & \xrightarrow{\tilde{\theta}_{vw}} & \tilde{\theta}_{vw}(g) \\
 & & & & & & \uparrow - \circ Gf
 \end{array}$$

(iii) $u \in B, v, w \in A$ の場合, 定義から

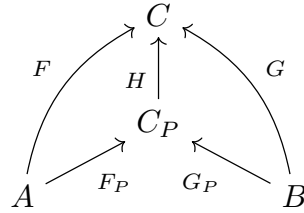
$$\begin{cases} H(g \circ f) &= \tilde{\theta}_{uv}(g \circ f) \\ Hg &= Fg \\ Hf &= \tilde{\theta}_{uv}(f) \end{cases}$$

であり, 一方 $\tilde{\theta}$ が自然変換だから $\tilde{\theta}_{uv}(g \circ f) = Fg \circ \tilde{\theta}_{uv}(f)$ である.

$$\begin{array}{ccc} P(u, v) \xrightarrow{\tilde{\theta}_{uv}} \text{Hom}_C(Gu, Fv) & & f \xrightarrow{\tilde{\theta}_{uv}} \tilde{\theta}_{uv}(f) \\ \downarrow P(\text{id}_u, g) & \downarrow Fg \circ - & \downarrow P(\text{id}_u, g) \quad \downarrow Fg \circ - \\ P(u, w) \xrightarrow{\tilde{\theta}_{uw}} \text{Hom}_C(Gu, Fw) & & g \circ f \xrightarrow{\tilde{\theta}_{uw}} \tilde{\theta}_{uw}(g \circ f) \\ & & \downarrow \tilde{\theta}_{uv} \\ & & Fg \circ \tilde{\theta}_{uv}(f) \end{array}$$

以上により H は関手であることが分かった.

このとき明らかに $HF_P = F, G_P H = G$ だから H は射 $\Sigma(P) \rightarrow \langle F, G \rangle$ である.



上で示したように $\widetilde{\varphi(H)}_{ba}$ は $H: P(b, a) \rightarrow \text{Hom}_C(Gb, Fa)$ と一致しているから, H の定義より $\widetilde{\varphi(H)}_{ba} = \tilde{\theta}_{ba}$ である. 故に $\varphi(H) = \theta$ となり φ は全射である.

定義から明らかに φ は自然である. 従って随伴 $\Sigma \dashv \Phi$ が成り立つ. φ の定義よりこの随伴の unit は η であり, これは同型である. \square

unit が同型だから $\Sigma: \mathbf{Prof}(A, B) \rightarrow \text{Cospan}(A, B)$ は忠実充満である (「随伴」の PDF を参照).

次に $\text{span } A \xleftarrow{F} C \xrightarrow{G} B$ に対して profunctor $A \rightleftarrows B$ が $G_* \otimes F^*$ により得られる. これは各点左 Kan 拡張の一般論により

$$G_* \otimes F^* \cong (yG) \otimes (F^\dagger y) \cong y^\dagger(yG) \circ F^\dagger y \cong F^\dagger(yG)$$

$$\begin{array}{ccc}
 & \widehat{C} & \xrightarrow{y^\dagger(yG)} \widehat{B} \\
 F^\dagger y \nearrow & \uparrow y & \swarrow \\
 A & \rightleftarrows & B \\
 F \searrow & \uparrow & \nearrow G \\
 & C &
 \end{array}
 =
 \begin{array}{ccc}
 & & \widehat{B} \\
 F^\dagger(yG) \nearrow & & \nearrow y \\
 A & \rightleftarrows & B \\
 F \searrow & \uparrow & \nearrow G \\
 & C &
 \end{array}$$

となる. そこで $\Psi\langle F, G \rangle = F^\dagger(yG)$ と定める.

命題 7. $\Psi: \text{Span}(A, B) \rightarrow \mathbf{Prof}(A, B)$ は関手となる.

証明. そのために $\text{Span}(A, B)$ の射 H (次の図式を参照) を取る.

$$\begin{array}{ccc}
 A & \xleftarrow{K} & D & \xrightarrow{L} & B \\
 & \searrow F & \uparrow H & \nearrow G & \\
 & & C & &
 \end{array}$$

左 Kan 拡張の普遍性により自然変換 $\Psi(H): \Psi\langle F, G \rangle \Rightarrow \Psi\langle K, L \rangle$ が得られる.

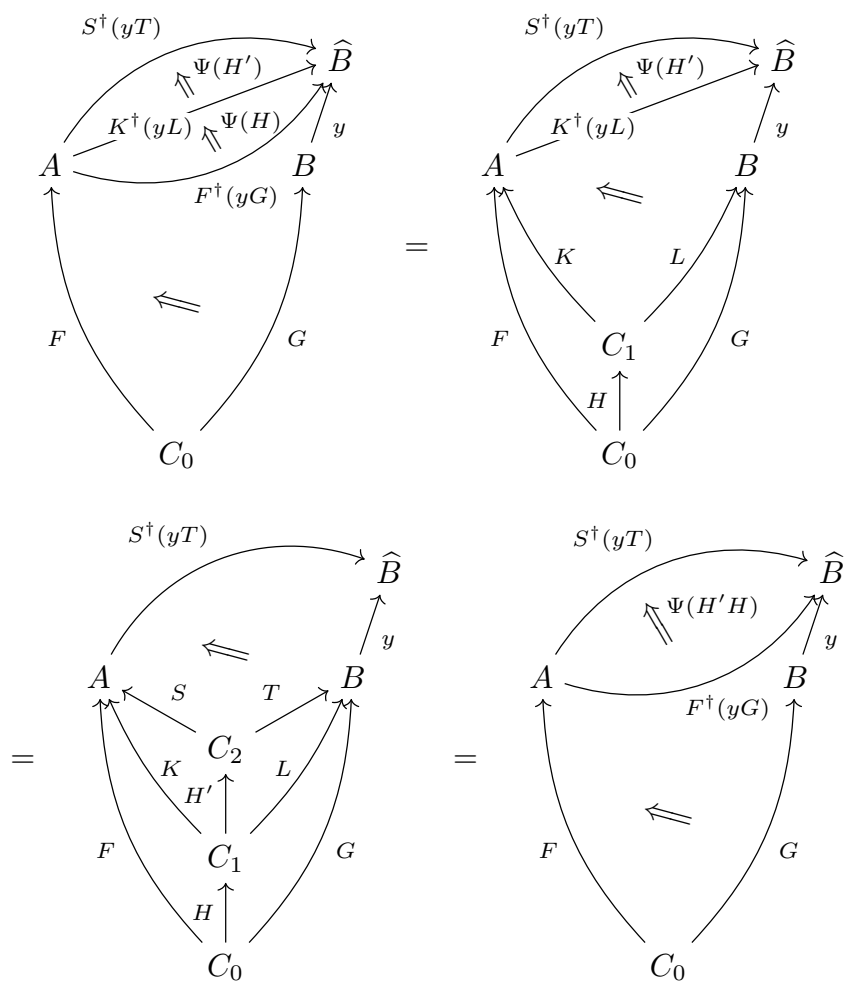
$$\begin{array}{ccc}
 & \widehat{B} & \\
 K^\dagger(yL) \nearrow & \Psi(H) \Rightarrow & \nearrow y \\
 A & \xrightarrow{F^\dagger(yG)} & B \\
 & \swarrow & \searrow \\
 & C &
 \end{array}
 =
 \begin{array}{ccc}
 & \widehat{B} & \\
 K^\dagger(yL) \nearrow & & \nearrow y \\
 A & \xleftarrow{K} & D & \xrightarrow{L} & B \\
 & \searrow F & \uparrow H & \nearrow G & \\
 & & C & &
 \end{array}$$

これにより Ψ が関手となることを示そう.

まず明らかに $\Psi(\text{id}) = \text{id}$ である. よって Ψ が合成と交換することを示せばよい. そこで $\text{Span}(A, B)$ の射 H, H' を次の図式のように取る.

$$\begin{array}{ccc}
 A & \xleftarrow{S} & C_2 & \xrightarrow{T} & B \\
 & \searrow K & \uparrow H' & \nearrow L & \\
 & & C_1 & & \\
 & \searrow F & \uparrow H & \nearrow G & \\
 & & C_0 & &
 \end{array}$$

このとき



より普遍性から $\Psi(H'H) = \Psi(H')\Psi(H)$ が分かる. □

逆に関手 $\Lambda: \mathbf{Prof}(A, B) \rightarrow \mathbf{Span}(A, B)$ が $\Lambda := \downarrow \circ \Sigma$ により定まる. (後に $\Psi \dashv \Lambda$ が分かる (命題 11).)

$$\begin{array}{ccccc}
 \mathbf{Span}(A, B) & \xrightarrow{\Psi} & \mathbf{Prof}(A, B) & \xrightarrow{\Sigma} & \mathbf{Cospan}(A, B) \\
 & \xleftarrow{\Lambda} & & \xleftarrow{\Phi} & \\
 & \uparrow & \downarrow & & \\
 & & & &
 \end{array}$$

profunctor $P: A \rightleftarrows B$ に対して $\Lambda(P) = (A \xleftarrow{F^P} C^P \xrightarrow{G^P} B)$ と書く.

$$\begin{array}{ccc}
 & C^P & \\
 F^P \nearrow & & \nwarrow G^P \\
 A & \rightleftarrows & B \\
 F^P \nwarrow & & \nearrow G^P \\
 & G^P \downarrow F^P & \\
 & \parallel & \\
 & C^P &
 \end{array}$$

コンマ圏の定義より, 圏 C^P は以下のような圏である.

- $\text{Ob}(C^P) = \{\langle a, b, f \rangle \mid a \in A, b \in B, f \in P(b, a)\}$.
- $\langle a, b, f \rangle, \langle a', b', f' \rangle \in \text{Ob}(C^P)$ に対して

$$\text{Hom}_{C^P}(\langle a, b, f \rangle, \langle a', b', f' \rangle) = \left\{ \langle g, h \rangle \mid \begin{array}{l} g: a \rightarrow a', h: b' \rightarrow b, \\ P(h, g)(f) = f' \end{array} \right\}.$$

$\theta: P \rightleftarrows Q$ を $\mathbf{Prof}(A, B)$ の射とする. Λ はコンマ圏を使って定義しているから, $\Lambda(\theta)$ は次の等式を満たすような関手 $C^P \rightarrow C^Q$ である.

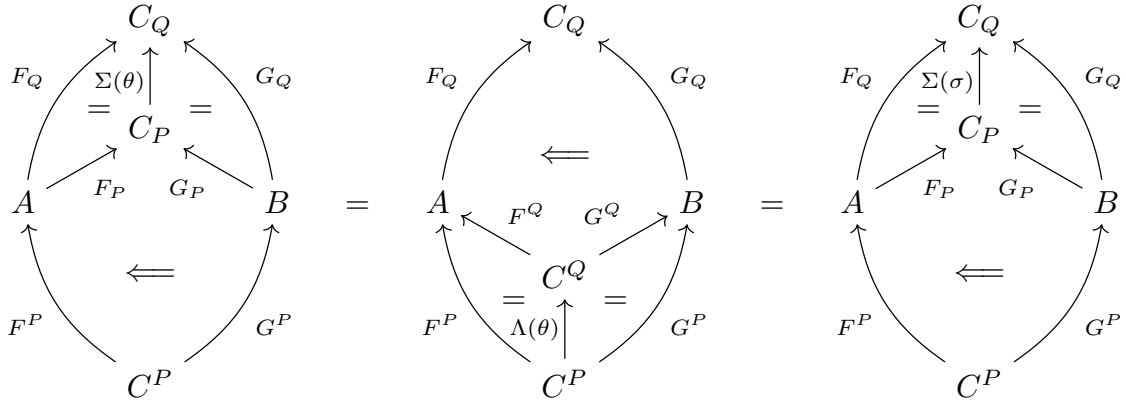
$$\begin{array}{ccc}
 \begin{array}{ccc}
 & C_Q & \\
 F_Q \nearrow & & \nwarrow G_Q \\
 A & \rightleftarrows & B \\
 F^P \nwarrow & & \nearrow G^P \\
 & C^Q & \\
 = \uparrow & & \downarrow = \\
 & \Lambda(\theta) & \\
 & C^P &
 \end{array}
 & = &
 \begin{array}{ccc}
 & C_Q & \\
 F_Q \nearrow & & \nwarrow G_Q \\
 A & \rightleftarrows & B \\
 F^P \nwarrow & & \nearrow G^P \\
 & C^P & \\
 & \rightleftarrows & \\
 & C^P &
 \end{array}
 \end{array}$$

命題 8. $\Lambda: \mathbf{Prof}(A, B) \rightarrow \text{Span}(A, B)$ は忠実充満である.

証明. $P, Q \in \mathbf{Prof}(A, B)$ とする.

まず忠実であることを示す. $\theta, \sigma: P \rightleftarrows Q$ が $\Lambda(\theta) = \Lambda(\sigma)$ を満たすとする. このとき $a \in A, b \in B$ に対して $\theta_{ba} = \sigma_{ba}$ であることを示せばよい. (ここで θ_{ba} と σ_{ba} は写像

$P(b, a) \rightarrow Q(B, a)$ である.) Λ の定義より



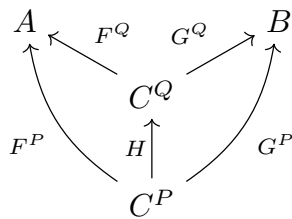
である. ここで $f \in P(b, a)$ とすると $\langle a, b, f \rangle$ は C^P の対象だから $\Sigma(\theta)(f) = \Sigma(\sigma)(f)$ となる. 故に Σ の定義から $\theta_{ba}(f) = \Sigma(\theta)(f) = \Sigma(\sigma)(f) = \sigma_{ba}(f)$ となって $\theta_{ba} = \sigma_{ba}$ である.

次に充満であることを示すため $H: \Lambda(P) \rightarrow \Lambda(Q)$ とする. $\theta: P \Rightarrow Q$ を定義しよう. そのために $b \in B, a \in A$ を取り $f \in P(b, a)$ とする. このとき $\langle a, b, f \rangle \in C^P$ だから $H\langle a, b, f \rangle \in C^Q$ である. 圏 C^P の定義より $H\langle a, b, f \rangle = \langle a, b, \theta_{ba}(f) \rangle$ と書ける. これにより写像 $\theta_{ba}: P(b, a) \rightarrow Q(b, a)$ が定まる. θ_{ba} は $b \in B, a \in A$ について自然である.

∴ $g: a \rightarrow a', h: b' \rightarrow b$ とする. 次の図式が可換であることを示せばよい.

$$\begin{array}{ccc} P(b, a) & \xrightarrow{\theta_{ba}} & Q(b, a) \\ P(h, g) \downarrow & & \downarrow Q(h, g) \\ P(b', a') & \xrightarrow{\theta_{b'a'}} & Q(b', a') \end{array}$$

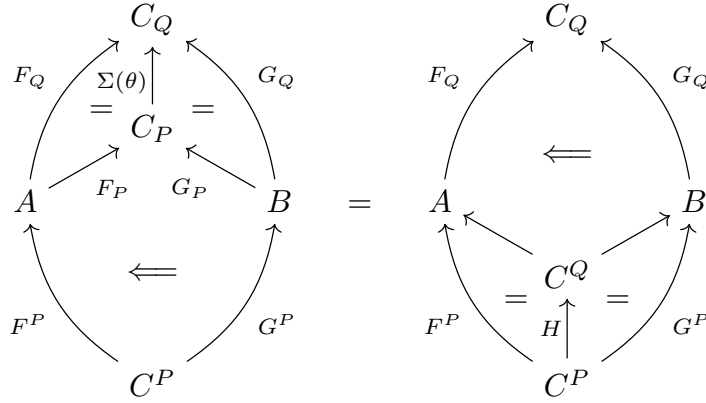
$f \in P(b, a)$ を取り $f' := P(h, g)(f)$ とする. このとき $\langle g, h \rangle: \langle a, b, f \rangle \rightarrow \langle a', b', f' \rangle$ は C^P の射である. 故に $H\langle g, h \rangle: H\langle a, b, f \rangle \rightarrow H\langle a', b', f' \rangle$ は C^Q の射である. 一方で H は span の射だから次の図式が可換である.



従って $H\langle g, h \rangle = \langle g, h \rangle$ となる. 故に $\langle g, h \rangle: \langle a, b, \theta_{ba}(f) \rangle \rightarrow \langle a', b', \theta_{b'a'}(f') \rangle$ が C^Q

の射だから $Q(h, g)(\theta_{ba}(f)) = \theta_{b'a'}(f') = \theta_{b'a'}(P(h, g)(f))$ となる。

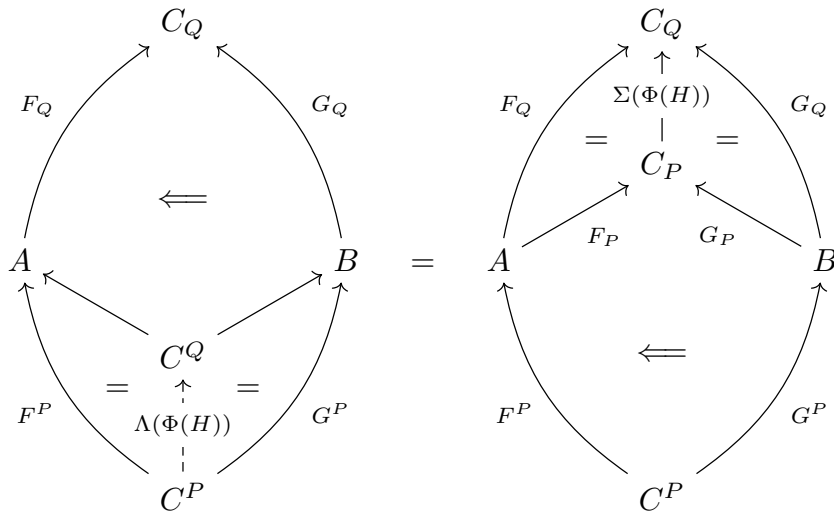
よって $\theta: P \Rightarrow Q$ となる。このとき定義から明らかに等式



が成り立つ。故に Λ の定義より $\Lambda(\theta) = H$ である。 □

命題 9. $\Lambda \circ \Phi \cong \downarrow$ である。

証明. $H: (A \xrightarrow{F} C \xleftarrow{G} B) \rightarrow (A \xrightarrow{K} D \xleftarrow{L} B)$ を $\text{Cospan}(A, B)$ の射とする。定義より $\Lambda(\Phi(H))$ は



で与えられる関手である。ここで

$$\Phi\langle F, G \rangle \cong \text{Hom}_C(G-, F-), \quad \Phi\langle K, L \rangle \cong \text{Hom}_D(L-, K-)$$

であり $\Sigma(\Phi(H))$ は $H: \text{Hom}_C(Gb, Fa) \rightarrow \text{Hom}_D(Lb, Ka)$ により定まる関手である。よって $\Lambda \circ \Phi \cong \downarrow$ である。 □

命題 10. $\langle L, \eta \rangle$ が $F: C \rightarrow D$ に沿った $E: C \rightarrow U$ の各点左 Kan 拡張であるとする. 任意の圏 X と関手 $G: X \rightarrow D$ に対して合成

$$\begin{array}{ccccc}
 X & \xrightarrow{G} & D & & \\
 P_1 \uparrow & \swarrow & \uparrow F & \searrow L & \\
 F \downarrow G & \xrightarrow{P_0} & C & \xrightarrow{E} & U \\
 & & \uparrow \eta & &
 \end{array}$$

は左 Kan 拡張である.

証明. 任意の関手 $S: X \rightarrow U$ に対して

$$\begin{aligned}
 \mathrm{Hom}_{U^X}(LG, S) &\cong \int_{x \in X} \mathrm{Hom}_U(LGx, Sx) \\
 &\cong \int_{x \in X} \mathrm{Hom}_{\widehat{C}}(\mathrm{Hom}_D(F-, Gx), \mathrm{Hom}_U(E-, Sx)) \\
 &\cong \int_{x \in X} \int_{c \in C^{\mathrm{op}}} \mathrm{Hom}_{\mathbf{Set}}(\mathrm{Hom}_D(Fc, Gx), \mathrm{Hom}_U(Ec, Sx)) \\
 &\cong \int_{\langle c, x \rangle \in C^{\mathrm{op}} \times X} \mathrm{Hom}_{\mathbf{Set}}(\mathrm{Hom}_D(Fc, Gx), \mathrm{Hom}_U(Ec, Sx)) \\
 &\cong \mathrm{Hom}_{\mathbf{Prof}(X, C)}(\mathrm{Hom}_D(F-, G\Box), \mathrm{Hom}_U(E-, S\Box)) \\
 &\cong \mathrm{Hom}_{\mathbf{Prof}(X, C)}(\Phi(G, F), \Phi(S, E)) \\
 &\cong \mathrm{Hom}_{\mathrm{Span}(X, C)}(\Lambda(\Phi(G, F)), \Lambda(\Phi(S, E))) \quad (\text{命題 8}) \\
 &\cong \mathrm{Hom}_{\mathrm{Span}(X, C)}(F \downarrow G, E \downarrow S) \quad (\text{命題 9}) \\
 &\cong \mathrm{Hom}_{U^{F \downarrow G}}(EP_0, SP_1) \quad (\text{コンマ圏の普遍性})
 \end{aligned}$$

だから $P_1^\dagger(EP_0) \cong LG$ である. □

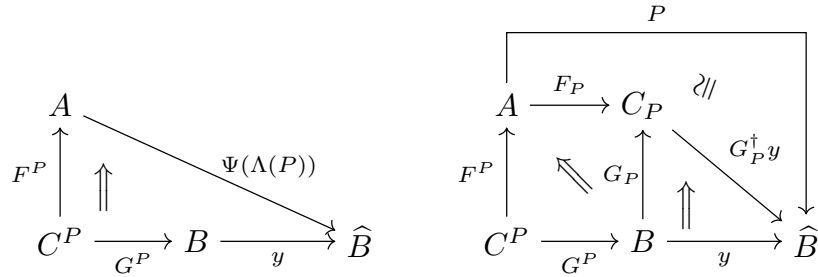
命題 11. 随伴 $\Psi \dashv \Lambda: \mathrm{Span}(A, B) \rightarrow \mathbf{Prof}(A, B)$ が成り立つ. 更にこれの counit は同型である.

証明. 随伴であることを示すため, $(A \xleftarrow{F} C \xrightarrow{G} B) \in \mathrm{Span}(A, B)$, $P \in \mathbf{Prof}(A, B)$ について自然な全単射

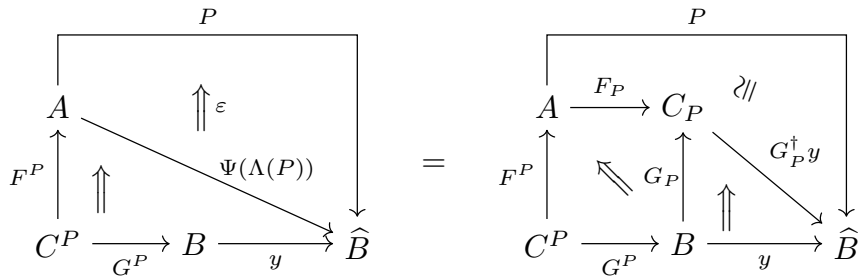
$$\varphi: \mathrm{Hom}_{\mathrm{Span}(A, B)}(\langle F, G \rangle, \Lambda(P)) \rightarrow \mathrm{Hom}_{\mathbf{Prof}(A, B)}(\Psi \langle F, G \rangle, P)$$

を定義する. そのためにまず自然同型 $\varepsilon: \Psi(\Lambda(P)) \Rightarrow P$ が存在することを示す.

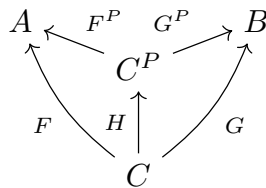
∴) 次の2つの図式を考える.



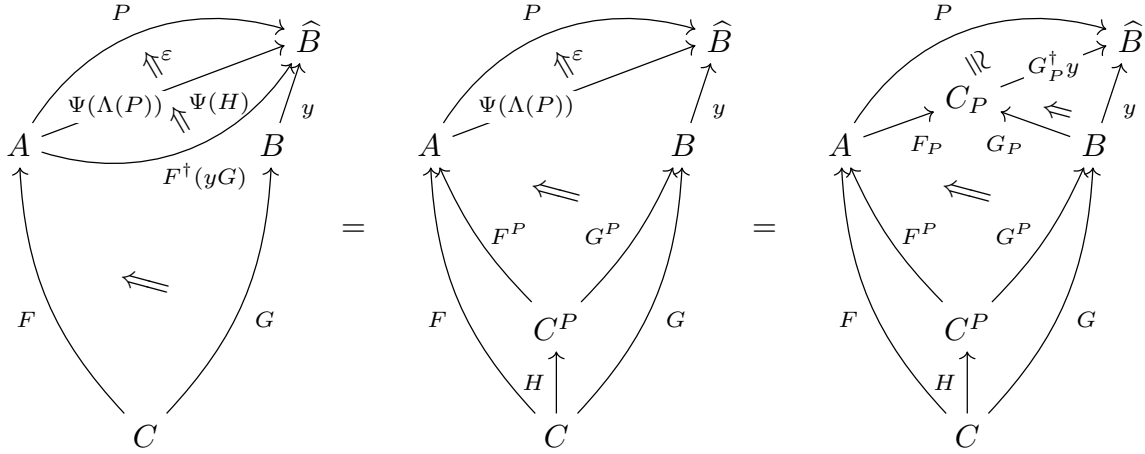
定義より $\Psi(\Lambda(P)) = (F^P)^\dagger(y \circ G^P)$ である. 一方 $A \xleftarrow{F^P} C^P \xrightarrow{G^P} B$ はコマ圏 $G_P \downarrow F_P$ として与えられていたから, 命題 10 により $(F^P)^\dagger(y \circ G^P) \cong G_P^\dagger y \circ F_P$ である. また命題 6 より $G_P^\dagger y \circ F_P = \Phi(\Sigma(P)) \cong P$ となる. 故に左 Kan 拡張の普遍性から自然同型 $\varepsilon: \Psi(\Lambda(P)) \Rightarrow P$ が存在して次の等式が成り立つ.



$H: \langle F, G \rangle \rightarrow \Lambda(P)$ を射とする. 即ち H は次を可換とする関手である.

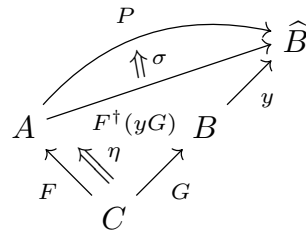


このとき自然変換 $\psi(H): \Psi\langle F, G \rangle \Rightarrow P$ を $\psi(H) := \varepsilon \circ (\Psi(H))$ で定める.



この $\psi(H)$ は全単射 $\psi: \text{Hom}(\langle F, G \rangle, \Lambda(P)) \rightarrow \text{Hom}(\Psi\langle F, G \rangle, P)$ を与える.

∴) 単射性は明らかだから全射性を示す. そのために $\sigma: \Psi\langle F, G \rangle \Rightarrow P$ を自然変換とする. このとき $\theta := \sigma_F \circ \eta$ と定義し (次の図式を参照),



H を

- 対象 $c \in C$ に対して $Hc := \langle Fc, Gc, \theta_c \rangle$
- 射 $f: c \rightarrow c'$ に対して $Hf := \langle Ff, Gf \rangle$

で定義する. これは明らかに関手 $H: C \rightarrow C^P$ を定める. また明らかに H は射 $\langle F, G \rangle \rightarrow \Lambda(P)$ であり $\psi(H) = \sigma$ である. 故に ψ は全射である.

定義から明らかに ψ は自然である. 従って随伴 $\Psi \dashv \Lambda$ が成り立つ. ψ の定義よりこの随伴の counit は ε であり, これは同型である. \square

以上により $\uparrow := \Sigma \circ \Psi$ と定義すれば

$$\begin{array}{ccccc}
 & & \uparrow & & \\
 & \lrcorner & & \lrcorner & \\
 \text{Span}(A, B) & \xrightarrow{\Psi} & \mathbf{Prof}(A, B) & \xrightarrow{\Sigma} & \text{Cospan}(A, B) \\
 & \xleftarrow{\Lambda} & & \xleftarrow{\Phi} & \\
 & \lrcorner & & \lrcorner & \\
 & & \downarrow & &
 \end{array}$$

より $\uparrow \dashv \downarrow$ となる。従って次の定理を得る。

定理 12. 関手 $\downarrow: \text{Cospan}(A, B) \rightarrow \text{Span}(A, B)$ は左随伴 \uparrow を持つ。 □

Λ, Σ が忠実充満だから $\uparrow \dashv \downarrow$ は冪等随伴である (「随伴関手」の PDF を参照)。そこで充満部分圏 $\text{Comma}(A, B) \subset \text{Span}(A, B)$, $\text{Cocomma}(A, B) \subset \text{Cospan}(A, B)$ を

$$\begin{aligned}
 \text{Ob}(\text{Comma}(A, B)) & \\
 & := \{x \in \text{Span}(A, B) \mid \text{ある } z \in \text{Cospan}(A, B) \text{ が存在して } \downarrow(z) \cong x\}, \\
 \text{Ob}(\text{Cocomma}(A, B)) & \\
 & := \{x \in \text{Cospan}(A, B) \mid \text{ある } z \in \text{Span}(A, B) \text{ が存在して } \uparrow(z) \cong x\}
 \end{aligned}$$

で定義すれば圏同値 $\text{Comma}(A, B) \simeq \mathbf{Prof}(A, B) \simeq \text{Cocomma}(A, B)$ が得られる。

参考文献

- [1] Jean Bénabou, Distributors at Work, <http://www.mathematik.tu-darmstadt.de/~streicher/>